SAMPLE　試読　サンプル

自虐な姉と二人暮らしですが、なにか？

ご注意・本作品はＳＭ小説です。

SAMPLE　試読　サンプル

SAMPLE　試読　サンプル

SAMPLE　試読　サンプル

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でＳＭ小説を執筆。独自の自虐的ＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

SAMPLE　試読　サンプル

目次

主な登場人物　８
バカマン　１０
ストリップ　２０
露出好き　３４
羞恥ジョギング　４６
洗濯　５９
買い物　７２
果てしなく　８６
散歩　１０２
はじめての朝　１１７
はじめての道具　１２９
オモチャ　１４１

都心で　１５９
公園で遊ぶ　１８５
個室ビデオ店　２１２
罠　２３０
ひとりずつ　２４７
舐め舐め地獄　２６４
なぞのヤツ　２８２
超サディスト　２９１
自虐女の末路　３００
外で　３０９
葬式　３２１
スナック　３３０
ライブ　３４１

天使　３５０
女大家　３６０
アヒル　３７７
ペット　３８７
水やり　３９７
吊し　４１３
復讐　４３０
アウェイな感じ　４４７
姉弟奴隷　４６４
ソドム　４８２
宴のあと　４９１
ジャグジー　５０１
ローマ風　５１１

慰めの報酬みたいな　５２１
公園暮らし　５３９
エンディング　５６０
誓約書　５６９
奥付　５８１

表紙・扉・奥付のイラスト提供
月工仮面
http://gekkoumask.blog14.fc2.com/

SAMPLE　試読　サンプル

主な登場人物

ぼく　あきら。事情が事情で匿名希望の学生。

姉（メス豚　自虐者）。バカマンコ略してバカマン。姉も学生。名前はミサ。

アパート「田端荘」　６室。１階の角がぼくたち。

田端千波（ちなみ）　田端荘の大家の若き妖艶な妻。アパートに隣接する大きな屋敷と広大な土地。大型ペットのミックとアルを飼育する愛犬家。

２０１号室　カツヤさん。夜勤の中年オヤジ。

２０２号室　内野さん。学生。姉と同期ぐらいの太っ

ちょ。

２０３号室　東堂君。学生。ぼくと同期ぐらい。

１０１号室　藤崎さん。スナックを経営する中年の姉妹。

１０２号室　根元さん。オヤジというよりジジイ。

１０３号室　ぼくたち。わけあり物件。自虐死した女性Ａさんが住んでいた……。

SAMPLE　試読　サンプル

バカマン

はじめまして。あきらです。

東京の中心からは、かなり郊外のアパート暮らしです。わけあり物件で格安です。ぼくは気になりません。

姉の名前は「ミサ」（漢字表記は想像におまかせします）。ぼくは「バカマン」とか「メス豚」とか呼んでいます。

二歳上のミサですけど、ぼくが男としての思春期を迎えるかなり前からエロ狂いなんでしょうね、あれは。

ぼくをオナニー道具にしようとしていた時期もありましたし。

うちは両親ともにまじめな家族で、祖父祖母も健在

で、家族六人で関東の地方都市で暮らしていたんですけど、姉はどうしてもそこを出たかったようです。
「あきらの学校が遠いから、わたしたちで二人暮らしするわ。ね、いいでしょ？　わたしも便利だし、バイトもしたいから」
まあ、二人とも学校まで自宅から片道二時間近くかかるので、往復四時間はキツイ。
ミサはバイトがしたくてしょうがない、と言っていますが、それはウソで、ほかにしたいことがあるからなんですけどもね。
「あきら、一緒に暮らそうよ。お願いだから。お姉ちゃん、なんでもするから」
昔からホントに何でもしてくれる姉です。

弟としては、ガッカリするぐらいダメ女です。
一時、アイドルになりたくて、原宿でスカウトされたことがあるのが自慢で、オーディションに書類を送りまくっていたこともあります。全部落ちました。
ぼくから見ると、あの頃がピークでした。もしタレントとかになって、ちょっとでもテレビとかに出たらすごいな、なんて思っていた自分が恥ずかしいです。
なれるわけないじゃん！
まあ、客観的に見て、ちょっと崩れた可愛さなんですよね。一緒に連れて歩くのに支障がないほどの花はあります。
ぼくより少し身長があって、足が長い。両親を恨みますけど、スポーツマンで学生時代にバレーボールの

選手だったこともある父のいいところを、姉は受け継いだのです。
ぼくは古典的な体形で、これはまんま母のもの。胴長短足系なんですよね。コンプレックスというほどじゃないけど。
ミサが書類審査で落とされるのは、内面の問題もありそう。それが写真にも出ちゃっている。
困ったことに、その頃から自虐趣味に溺れていたからです。
年齢の割にスケベな顔つき。笑顔が似合わない。履歴書の字も、最初の行と最後の行では人格がまるで違うような、破綻した感じ。
姉はダメなやつなんです。

そもそも自虐癖が強すぎる。
忘れもしません。淡い記憶です。
「ここを触って」
「いやだよ。汚いよ」
「お願い。お姉ちゃん、なんでもするから」
この口癖がそもそも姉の自虐体質を物語っています。
普通は「なんでもする」は方便で、あとで「そんなことするかよー、信じたおまえがバカなんだー」的なエンディングのはずです。
だけどミサは本当にするのです。
「じゃ、二階から飛び降りてみてよ」
ぼくもそのころは欲望が定まっていませんから、バカなことを注文するのです。

これはまあ「そんなこと、できるはずないから、こっちもやらないよ」という断り文句ですよね。姉が骨折するところが見たいなんて、本気で思う弟はまあ、いないわけで。

「いいわ。いまする」

バカですよね。

普通はこういう展開じゃない。

大人っぽくなってきた性器を、ぼくにいじってもらいたいだけで、二階から飛び降りる姉が、どこにいます？

ここにいるわけです。

幸い、足首をくじいた程度でよかったのですが、発情した姉はなんでもするんだ、ということを学びまし

た。
　くじいてシップを貼った足首を握って、じわじわと痛い思いをさせながら、ぼくはミサの性器を指先で触ってやったものです。
「こうすればいいの？」
「痛い。そう。痛い。そっちじゃなくて」
　痛がりながらも願望を満たそうとする滑稽なメス豚がそこにはいたのです。
「あ、これまでぼくは、こいつのことを姉だと思い込んでいたけど、なんだ。エロ狂いでドMの変態女じゃないか」
　そう悟ったのです。
　たいがい祖父母はなにかの会合でいない午後、父母

はもちろん仕事でいない。
こんなとき、ミサは発情します。
ぼくが友だちと遊びに行こうとしても、すがってくるのです。
「お願い。これだけやってからにして。お姉ちゃん、なんでもするから」
「じゃあ、ここに友だち呼んでもいいの？　友だちにミサのバカマンを見せてもいいの？」
「わかった。いいわ」
いや、そこはフツー否定でしょ。なんでも肯定だもの。危なくてうかつなことが言えません。わざと言ってましたけども。
ぼくの親友たちとは、いまでもたまに連絡を取って

いますが、このときの話はみんなのお気に入りネタです。
「おまえの姉ちゃん、マジ、エロかったな」
「ホントだよ。あとで、あの記憶だけで抜けたもの」
「おれなんて、夢に出て来て、それが最初の夢精だ」
「あんな姉ちゃん、欲しいなあ」
ははっ。
笑っちゃう。
友人たちはいいんです。ちょっとした思い出ですんでいるから。
ぼくはその姉といまも暮らしているんです。笑い話ではすみませんって。
ミサはぼくと友人たちの前でストリップをしたので

す。いえ、ストリップではないですね。
「これ、読んでくれない？」
お願いされたのは、例の人格がバラバラな感じのする汚い字で書かれたシナリオでした。ぼくのセリフだけしかないのです。ぼくのセリフがあって、つぎにト書きで「実行を確認」とあるだけ。
「えー、これぼくが言うの？」
「お願い」
お願いってさ。聞き飽きたぜ、という感じもしますけども。

SAMPLE　試読　サンプル

ストリップ

ついこの間のことのようです。

あの頃はぼくはまだ、そんなにスレていませんでした。剥けてない、というか。

友人たちの前で、学芸会のように、ぼくはミサに渡されたシナリオを読まされたのです。

「おい、メス豚。どんなパンツを穿いてるんだ。見せてみろよ」

「はい」

あれは冬だったんですが、ミサはセーター、ツイードのスカートという感じでした。

「みなさん、メス豚のパンツをごらんください」

ミサはそう言うと、自分からスカートをめくったのです。
白い普通のパンツでしたが、明らかに濡れてシミができているので、ぼくは恥ずかしくて……。
実行を確認。次のセリフです。
「うしろを向いてみろ」
「はい」
ミサはうしろを向いて、お尻を突き出してパンツを見せるのです。そのパンツにはマジックで「メス豚」と書いてあるのです。
「おまえみたいな女の弟で、ぼくがどれだけ恥ずかしいか、わかってるのか？」
「すみません」

「スカートを脱げ」
「はい」
セーターにパンツ。
男子の興味は股間に集中です。
「おまえはそうやって感じているんじゃないのか。なんでパンツが濡れているんだよ」
「ごめんなさい。恥ずかしい」
恥じらうミサは演技ではないとは思うのです。手も膝も震えているのがはっきりわかります。
プールなら水着でも平気でしょうが、狭い部屋の中で、ぼくも入れて五人の男の中で彼女ひとりが、肌をさらすなんて、ミサは初めてのことでしょう。
ただ、どうもミサは以前からオーディションのとき

などに、こういう妄想を抱いていたみたいなんですよね。
「パンツをぐいっと引き上げてみろ」
「ああん、恥ずかしい、こうですか？」
両脇から自分でパンツを引き上げてくっきりとあそこを浮き上がらせると、ぼくも友人たちも、興奮しちゃっています。
その目つきに、きっとバカな姉は急に怖くなったんだと思います。
「パンツを脱げ」
「えっ」
これはぼくのアドリブ。シナリオだとセーター、ブラウスと取って下着になるわけですが、それはだるい。

それに姉が本当にしたいことは、自分の性器をみんなに見せることでしょう。
涙目でぼくを見るミサ。
弟の裏切りに驚きながらも、なんだか悦んでいるよう。瞳の奥にチロチロといやらしい炎が見え隠れしています。
このとき、ぼくはミサって自虐好きで、裏切られることを期待しているんだと気づきました。
こっちにやらせておきながら、それ以上を求める……。こいつは思った以上に、やっかいだぞ、と。
「わかりました」
引き上げていたパンツに、指をからめていきます。
そしていっきに膝までおろしました。

シナリオでもパンツをおろすところがあるので、そこに飛びます。
「そのままだ。みんなによく見てもらうんだ」
「は、はい。メス豚ミサのいやらしい女の部分を、どうかごらんください」
友人たちは、体を乗り出し、パンパンのあそこをごまかしながら、顔を近づけます。
立って、ただあそこを見せているだけです。この頃の姉は、柔らかな細い毛が生えていましたが、全体に白くて、きれいな恥丘でした。
かわいいのです。ぼくは毎日にように指で触っていたので、その構造をかなりよく知っていたのですけども、友人たちは知らないらしく、最初は興奮していま

したが、しだいに冷めていくのがわかりました。
みんな、まだ無邪気だったのです。セックスの方法は知っていても、経験はなく。いずれそういうことが起こることは知っていても、「まだ先だ」と思っていたわけで。
「よし、せっかくだから、全部脱いで」
「え？」
もうシナリオは終わりです。
「早く」
「はい」
おまんこを友人たちに見せながら、セーター、ブラウスを脱いでいくと、そっちのほうが友人たちは興奮しはじめました。

オッパイは永遠なんです。男の願望です。
ピークはブラジャー。白いブラジャーのまぶしさ。そして谷間がそこそこ大人っぽくなっているミサ。いやらしくも、柔らかそうな肌。
「ブラを取れよ」
ミサは予定していたはずなのに、震えてうまく外せずにいますから、しょうがなくぼくが手伝ってやりました。すると、友人たちが「いいなあ」とつぶやいています。
ブラを取ると、乳房は本格的に出来上がっていない感じですが、明らかに女性らしい。
二歳しか違わないので、はっきり言って同級生たちとあまり変わらない姉の全裸を見て、友人たちは興奮

しているわけです。
同級生の「あいつよりデカイ」とか「カッコがいいよ、こっちは」みたいに誉めていると、ミサもけっこう落ち着いて微笑みが戻ります。
「おっぱいを触ってもいい？」
これはぼくが言ったのです。
「はい」
だけど、ぼくより早く友人たちが手を伸ばしていました。
ちょっと嫉妬。
このとき、あとから思うと二つの選択肢があったと思います。姉が大事だから「おまえらやめろ」と怒鳴って、友人たちを追い返す。

いかにも弟らしい行動。
だけど、ぼくは違っていました。
「ミサ、そこに横になって、いつもやるように自分でバカマンコをいじってみせて」
ミサは返事はしません。どうせ立ってはいられない状態だったのでしょう。
フローリングの床に横になると、指先で股間を刺激しながら、友人たちに乳房を触らせたのです。
なんだか子豚が母豚に群がっているみたいだなあ、なんてぼくは思っちゃったのですね。
たぶん、このときの選択がその後を決めたのだと思います。
ぼくはミサが好きです。

バカで淫乱で自虐な姉ですが、身内だし。小さい頃からよく知っているし。何度も助けてもらっていますし。いろいろとお世話になっています。

だからといって、ミサの体を他人に与えるのを完全に否定するわけでもないのです。

「おいらだけの姉ちゃんだよー」などとは思わない。姉は姉。いやらしく、汚らしいメス豚のミサなのです。

こんなやつのことで、煩わしい思いなんてしたくねえぜ、とか思っちゃう。

なんでしょうね。不思議ですが、このときのぼくは、ミサがすごく悦んでいるんだろうなあと思って、ちょっとうれしかったりもしたんですよね。

SAMPLE　試読　サンプル

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一三年五月刊行　二〇一九年二月二版

著作権　あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。